

主催 邦楽連合会

社団法人 義太夫協会

中央区銀座六の十八の二演舞場B
電話(五四一)五四七一

清元協会の

港区西麻布一の二の三の四の五
電話(四〇五)八〇〇五番

財団法人 古曲会

中央区銀座八ノ六ノ三 新橋会館
電話(五七二)〇二一六番

新内協会の

新宿区大久保二の二三の二
電話(二〇〇)四六五三番

常磐津協会の

目黒区上目黒四の三十三の十四
電話(七一五)一五一八番

社団法人 長唄協会

中央区銀座二の十一の十九の四
電話(五四二)六五六四番

社団法人 日本三曲協会

港区赤坂二の十五の十二の四〇三
電話(五八五)九九一六番

(五十音順)

後援 東京都

昭和六十三年三月六日(日)

第一生命ホール

第一部 十二時半開演

四時終演

第二部 四時半開演

八時終演

'88 都民芸術フェスティバル

第十八回

邦楽演奏会

— 邦楽名曲選 —



'88 都民芸術フェスティバルに寄せて

東京都知事 鈴木俊一

私はいま、ふれあいとうるおいを大切に「マイタウン東京」づくりで全力を注いでおります。なかでも芸術文化の振興は、私たちに豊かな心とゆとりある生活を与えてくれるものとして、大変重要なことと考えております。その意味でも都民芸術フェスティバルを他の文化的施策とともに、都民の要望と期待に十分応え得るものとし、また国際的にも誇れる催しとして今後とも一層充実、発展させてまいりたいと考えております。

この催しに、一人でも多くの皆様が参加され、優れた舞台芸術に接し、心ゆくまで楽しんでいただきたいと存じます。おわりにこのフェスティバルに参加し、東京都の芸術文化の振興にお力添えくださいました邦楽連合会のみなさんすばらしいご活躍を心からご期待申し上げます。

今年も都民芸術フェスティバルのシーズンがやってまいりました。ハズされた芸術を、心ゆたかな、くらしの中へVをキャッチフレーズとしてはじめられたこのフェスティバルも、都民の皆様を支えられ、励まされて、本年度、ちょうど第二十回を迎えることになりました。

この記念すべき年に当たり、出演者の方々は最高の舞台芸術を提供しようと例年にも増して意欲に燃えていると伺い、頼もしく思っております。都民の皆様熱い声援とご来場を期待してやみません。

'88都民芸術フェスティバル参加公演（昭和62年度東京都助成公演）一覧

分野	種目	演目	期日・会場	入場料金	問合せ先
音	オペラ	ワーグナー「タンホイザー」(原語上演) (二期会オペラ振興会)	2/12・2/14・2/15 東京文化会館大ホール	10,000~1,500円	(財)二期会オペラ振興会 (370)6441
		ヴェルディ「椿姫」(原語上演) (藤原歌劇団)	2/21・2/23・2/25 東京文化会館大ホール	9,000~1,500円	(財)日本オペラ振興会 (369)7020
		石井 敏「袈裟と盛遠」(日本オペラ協会)	3/24・3/25 東京文化会館大ホール	7,000~1,500円	(財)日本オペラ振興会 (369)7020
楽	室内 オーケストラ	第19回 都民のための コンサート	1/17・2/2・2/6・2/27・3/17・3/18 東京文化会館大ホール	2,500~1,000円	(財)日本演奏連盟 (437)6837
		室内楽	2/16・3/14 東京文化会館小ホール	2,000円	
	ボ ン ゴ ラ	ジャズコンサート	3/1 板橋区立文化会館	2,000円	(財)日本音楽家協会 (585)3903
	邦楽	第18回邦楽演奏会	3/6 第一生命ホール	1,500円	邦楽連合会 (571)0216
演 劇	新 劇	福田善之「真田風雲録」(合同公演) 一講談と歴史による音楽劇一	1/23・1/24・1/31・2/2~2/5 1/25~1/30・2/1 よみうりホール	4,000円	新劇団協議会(341)8151 劇団青年座 (467)0439
		児童 劇	マークトウェイン「トム・ソーヤーの冒険」 (合同公演)	2/18~2/28 朝日生命ホール 3/2 江東区児童会館 3/10~3/12 東京都児童会館	前売 2,300円 当日売 2,500円 団体 1,700円
	舞 レ エ	「シルヴィア」(グイアナのニンフ) 「セレナード」 「シンフォニー・イン・D」 (四大バレエ団競演) 「EMBRASSER LE TEMPS」 「バキータ」	3/2~3/4 東京文化会館大ホール 1/7~1/9 東京文化会館大ホール	6,000~2,000円 中高生無料招待あり 6,500~2,000円	(財)日本バレエ協会 (462)5524 スターダンサーズ・バレエ (401)2283 チャイコフスキー記念東京バレエ団 (725)8000 東京シティ・バレエ団 (379)1471 牧阿佐美バレエ団 (460)9411
踊	現代 舞踊	青木 健「制服」 黒沢輝夫「ベートーヴェン第9交響曲-人海無情-」 北井一郎「風の祭礼」	1/31・2/1 東京文化会館大ホール	3,000~2,000円 無料招待あり	(財)現代舞踊協会 (400)4544
	日本 舞踊	第31回日本舞踊協会公演	2/15~2/17 国立劇場大劇場	5,000円 無料招待あり	(財)日本舞踊協会 (533)6455
古 典 芸 能	能	都民能	1/16 国立能楽堂	2,500円	(財)能楽協会 (574)6441
		式能	2/21 国立能楽堂	5,000円	
	民俗 芸能	第19回東京都民俗芸能大会	3/12 サンパル荒川 3/13 青梅市民会館	無料招待	東京都民俗芸能大会実行委員会事務局 0482(69)4174(宮尾)
	寄席 芸能	第18回都民寄席	2/6・2/13・2/19・2/20・2/26・2/27 3/5 東村山市中央公民館他7会場	無料招待	都民寄席実行委員会事務局 0423(81)5534(大石)
都民芸術フェスティ バル20周年記念公演		第1部 能(舞囃子)・単人形・新内 語・日本舞踊 第2部 記念式典・バレエ・現代舞踊 ポピュラー・管弦楽	1/22 東京文化会館小ホール 東京文化会館大ホール	無料招待	東京都教育庁社会教育部文化課内 都民芸術フェスティバル 20周年記念事業実行委員会事務局 (211)5111 内線44532

©これらの個々の公演の詳細に関するお問合せは各団体へ、都民芸術フェスティバル全般にわたるお問合せは東京都教育庁社会教育部文化課(電話 212-5111 内線 44-531, 44-532)へお願いいたします。

第一部 番

組 (十二時半開演)

一、萩江深川八景

同	同	同	唄
萩江	萩江	萩江	萩江
かすみ	香幸	みさを	ちか
同	同	同	三味線
萩江	萩江	萩江	萩江
恵美子	啓子	みな	さわ

二、清元深山桜及兼樹振 (保名)

同	同	浄瑠璃
清元	清元	清元
延志佐	延秀佳	延志寿葉
同	同	三味線
清元	清元	清元
延秀喜之	延八寿美	延荣美津

三、常磐津 若木花容彩四季 (曾我対面)

同	同	浄瑠璃
常磐津	常磐津	常磐津
清若太夫	津太夫	清勢太夫
上調子	同	三味線
常磐津	常磐津	常磐津
啓寿郎	一寿郎	菊助

四、新内千日寺名残鐘 (三勝縁切り)

浄瑠璃	富士松	加賀
三味線	新内	勝一朗
上調子	新内	勝二朗

五、義太夫 壺坂観音靈驗記——壺坂寺の段——

観音	お里竹本	沢市竹本	三味線
土佐恵	綾之助	土佐廣	鶴澤
			悠美

六、箏曲 奥組雲井曲

箏	岸辺	藤井	千代賀
箏	岸辺	百代	
箏	美千賀		

七、長唄 綱館之段 (綱館)

同	同	同	唄	三味線
今藤	今藤	和歌山	杵屋	杵屋
佐太蔵	六史	富太郎	巴紗鳳	伊三郎
				伊三郎
				巴太郎
太鼓	立鼓	小鼓	笛	杵
藤舎	田中	望月	望月	柏屋
清晃	左幸	太建志	左太郎	伊三郎
			晴光	伊三郎

囃子

第二部 番 組（四時半開演）

一、箏曲 昔 富崎春昇作曲 新

箏 富崎 富美代
三弦 富崎 春琴
同 富中 富美和

二、宮 菌 鳥 辺 山

浄瑠璃 宮 菌 千 千
同 宮 菌 千 千
同 三味線 宮 菌 千 千
同 宮 菌 千 昇

三、義太夫 増 補 大 江 山 — 戻り橋の段 —

若菜実は鬼女 竹 本 駒之助
網 竹 本 朝 重
三味線 鶴 澤 寛 八
八 雲 鶴 澤 寛 輔

四、清 元 日 月 星 昼 夜 織 分（流 星）

浄瑠璃 清 元 成美太夫 三味線 清 元 益寿郎
同 清 元 藤世太夫 同 清 元 吉志郎
同 清 元 小成太夫 上調子 清 元 静二郎

五、新内関取千両幟

浄瑠璃 新内 光翁太夫
同 新内 勝英太夫

三味線 富士松 菊三郎
上調子 鶴賀 喜代寿郎

六、常磐津戒詣恋釣針(釣女)

浄瑠璃 常磐津 文字太夫
同 常磐津 小文字太夫
同 常磐津 八重太夫
同 常磐津 一佑太夫

三味線 常磐津 文字兵衛
同 常磐津 八百八
上調子 常磐津 紫弘

七、長唄京鹿子娘道成寺(娘道成寺)

唄 杵屋 勝五郎
同 杵屋 崇光
同 杵屋 勝江草
同 杵屋 勝彦
同 利光
同 坂田 仙蔵

囃子

三味線 杵屋 勝三郎
同 杵屋 三造
同 杵屋 和四蔵
同 杵屋 和宗
同 杵屋 勝招也
同 杵屋 三十朗
小笛 鳳声 晴雄
立鼓 望月 左武郎
大鼓 望月 長左久
太鼓 望月 喜三郎
藤舎 呂雪

歌詞と解説 (演奏順)

(解説 竹内道敬)

第一部

一、萩江節 深川八景

萩江節というのは、長唄からわかれたもので、長唄が舞台(劇場)音楽として発展したのに対し、萩江節は、より繊細に唄う方向をねらって完成した。江戸幕末のイキな風潮をあらわした唄で、和らかな唄い方を特色とする。

この曲はその萩江節の中でも代表曲といわれる曲で、深川の名勝を近江八景になぞらえ、唄ってある。幕末の頃に出来たもので、四世萩江露友の作曲と伝える。

三下りへ四季の姿のさまざまなれや、月雪花の顔と顔、色に目馴れて、香りになずみ、眺め多かるその中に、屏風にうつす深川や、はまりて濡る袖が浦、入り来る帰帆の数々に、へ永代橋の水鏡、うつせば映る曇らぬ天下、一の鳥居の夕照は、家並静かに鄙さびて、またひとしおの、へ永代寺の晩鐘、聞いておどろく鳥もなし。冬の木場には雁落ちて、たぐいなづなの春景色。あれ見よさんさ、これ見よさんさ、さんさやんさで走るささ舟。

へ客は櫓柏子おも楫や、とり楫、舟は変ろと主かわらずに、来てくれ河岸に、それそれ舟が、へ月まどかにや塩浜の、秋は短かき夜半なりと、思い合つたる仲町の、そもや土橋の渡り初め、逢い初めし夜が縁じやも

の、心と心が合点なりや、指切り、髪切り、入ればくろ。へ野暮な起請も神々さんへ、お世話をかける筈もなし。ああ辛気あ辛気。口舌洲崎の嵐も晴れて、富士をいたたく明日の夜は、へ佃の雨に千鳥啼く、恋しさよ、ゆかしさよ。都の風の吹かまほし。

二、清元 深山桜及兼樹振 (保名)

篠田金治作詞、清沢万吉(のちの初世清元齋兵衛)作曲。文政元年(一八一八)三月、江戸都座で三世尾上菊五郎が演じた七変化舞踊のうち、その三番目「小袖物狂い」。

義太夫節「芦屋道満大内鑑」の一部を脚色したもの。阿部保名は、その恋人榊の前が死んだとき、気が狂い、形見の小袖をもってさまよう。非常に好評で、世に清元の出世浄瑠璃という。今でも人気が高く、よく上演される。

へ恋よ恋、われ中空になすな恋、へ恋風が来ては袂にかいもつれ、思う伸をば吹き分くる、花に嵐の狂いてし、心そぞろにいづくとも、道行く人に言聞えど、岩堰く水と我が胸と、砕けて落つる涙には、かたしく袖の片思い、へ姿もいつか乱れ髪、誰が取り上げていうことも、菜種の畑に狂う蝶、翼交わしてうらやまし、へ野辺の陽炎春草を、素袍袴に踏みしだき、狂い狂いて来たりける。

詞「何じや、恋人がそこへ行た、おどれどれ、どれどれ、ええまた嘘いうか、わっけもないこと、いうわいやい」

へアレあれを今宮の、へ来山翁が筆すさみ、土人形の色娘、へ高根の花や折ることも、泣いた顔せず、腹立てず、へ愠気もせねばおとなしゅう

あらうつなの、へ妹背仲、へ主は忘れてござんしよう。

へしかも去年の桜時、植えて初日の初会から、逢うての後は一日も、便りきかねば気もすまず、うつらうつらと夜を明かし、へ昼寝ぬほどに思いつめ、たまに逢う夜の嬉しさに、へ酒事やめて語る夜は、いつよりもツイ明けやすく、去のう、去なきぬ、口説さえ、へ月夜烏にだまされていつそ流して居続けは、日の出るまでもそれなりに、へ寝ようとするれど寝いられねば、寝ぬを恨みの旅の空。

二上りへ夜さの泊りほどこが泊りぞ、草を敷き寝の肘枕、一人明かすぞ悲しけれ、悲しけれ、へ葉越しの、幕の内、昔恋しき面影や、移り香や、その面影に露ばかり。

三、常磐津 若木花容彩四季 (曾我対面)

中村重助作詞、五世岸沢式佐作曲。天保九年(一八三八)正月、江戸市村座上演の「伊達競全盛曾我」の第一番目大詰に初演。

工藤が狐の面をつけ、曾我兄弟が掛篋をもってセリ上り、釣狐の振りになり、面をとってから、この「対面」になるという趣向。これはさらに引き抜いて「三人生酔」になるといふ構成だった。

江戸の初春狂言は、曾我の対面が出るのときまっていたが、そのときの浄瑠璃が残っているのは珍らしい。おおらかな初春気分を味わいたいものである。

へ春霞引きは返さじ武士の、弥猛心の兄弟が、十八年の天津風、今日吹き返す葦屋町、若木の花の対面は、これ御最良を釣狐、へわれは化けたと面影を、工藤も写す水鏡、北斗の星も明けの春、まだ若水を汲み上げ、お取立なる大役は、一藤若若若若若、花の庵へ慕い寄る、蝶と千鳥の晴小袖。

へ君が代は、千代に八千代に細石、ゆるがぬ御代のこれ礎、へ今日今様の吼職を、へ写してここに狩衣、へ秋野にあらぬ春の野に、あさる雉子の親鳥を、待ち設けたる椎が本、その無念さの月と目を、五つや三つの頃より、小弓に小矢を取り添えて、狙いの的も狩人が、若草繁る草隠れ、杖突き野道ちよこ、ちよこ、と足爪立て、姿乱るる霜柱、ぞつとそげ立つ犬の声、へあら浅ましや恨めしや、野干の性根奪わんと、懸けわたしたる鳴子篋、引かれ招かれ今日のお目見得、へ梅あらばたちまちに寄りきせんと宣す、わが庭前の花によそえ、入り来りし二人の者、そのまま親疎も分たず、今日の役目申し付けたも、この祐経が思う仔細あつての事、最前よりの立振舞、正しく二人は、へなるほど御推量の上は何をか包まん、われは河津の三郎祐安が遺児の兄弟二人、へふむさてこそ御身は兄の一万、今は祐信が養子となり、へ曾我の十郎祐成と名乗ります、へしてまた弟はその昔、箱根山の稚子育ち、へ北条殿の烏帽子にて、曾我の五郎時致、へさては二人は祐成時致、へ祐経殿、へはて珍らしい対面じやなあ。

へ親の敵祐経親念、へあこれ、必ず粗相のない様に、へ思い込んだるそのありさま、さて、へそちらは似たわ、似たわ、へ似たとは誰に、へ河津三郎祐安に、へなんと、へ思い出せばおそれよ、へ語るも過ぎし一昔、へ君の名代祐経が、へ二所権現へ参籠に、初見参の稚児模様、紅葉にしかも一家なる、河津が胤と聞くからに、水に棲まんも心愛く、茶の通い路を許せしに、へ時こそ来れござんなれ、畳ざわりもあらくれし、拳も固き祐経が、顔見覚えてはなかく、へ抹香臭え仏門も、へ蹴破る破戒魔界修羅、不動が滝に荒行の、念願ここに成就して、へ今日巡り合う祐経を、へ逃さじものと飛びかかるを、へあこれ、へその獺獺も春気やら、屠蘇の機嫌が知らねども、じつと堪えて引け四つ、へ狙う時節を待合の、辻をちら、へ風吹き鳥が薄黒な、蝙蝠羽織のでもさつても気短な、

へ南京の唐助殿から北京のおさい殿へ、唐詩で記す送り文、これは困つて候よ、心通じて文字知れず、それさ、へ四角浮世はまなならぬ、ままたしてさえ三度に二度は、浮世の中を見返り柳、風に焦らされ纏れて解けて、解けて纏るる川柳、さとりせ給え粹様と、背中をとんと現か夢か、夢の間忘れぬ時致が、俱不戴天の仇敵、踏み鳴らしたる金剛力、すさまじくもまた勇ましき、

へかくまで逸るはもつともながら、この場で敵と討たれまい、へそりやまたなせ、へ富士の御狩の総奉行、そのお役目勤めざるその内は、この身にあやまちあらば、兄弟はもとより、父祐信が身の上なりと知らざるか、へすりやその役目終らぬ内は、へ敵と討つ事叶わぬか、ちええ、宝の山に入りながら、へあいや、手を空しくは帰すまじ、この祐経が別荘へ写し置いたる狩場の地割、とくとこれにて見物いたせ、へ見渡せば、げに白扇をさかさまに、懸かる庭地に東海の、天も低しと築き上げし、裾野の様を写し絵や、へまず中央に立並ぶ、君の仮屋に等しきは、へ春の山辺の臘染、へ弓張月に乱れ星、弓も袋に納まりし、鶴舞う空の朝日影、和田の岬に立つ浪も、雌竜雄竜の三つ鱗、名も昇竜の勢いや、へ狩場に集う駿足は、あっぱれ相馬の黒一文字、大一大万大吉と、似寄りも近き四つ目結、へ五三の桐や花靱、数々多きその中に、乾に当る仮屋こそ、へ花待ち得たる祐経が、へ時も幸い五月間、へすりや臆月下旬に、へ討たれんとや、へあれあの声はほととぎす、どうでこの身は冥途の鳥、へ名残男鹿の狩衣、へその五月雨に、へ晴れ間を待つて、へこりや、本望遂げい、へいうにや及ぶ、へ裾野で逢おう、へさらば、へさらば、へ雲井に高きほととぎす、名を満天に揚羽の蝶千鳥立ち並び、歩みの板敷き踏み鳴らし、後や枕の兄弟が、本望曾我と末の世に、歌舞伎の花とぞ祝しけり

四、新内節 千日寺名残の鐘 (三勝半七)

元禄八年(一六九五)二月七日、大阪千日の墓所南側石垣下の畑で、襷結び心中があった。男は奈良五条新町の赤根屋半七三十四歳、女は大阪長町美濃屋の湯女三勝二十四歳だった。この二人が襷を結び合せ、刃をもって相果てた心中は非常な評判となり、すぐに大阪の岩井半四郎座で脚色上演された。別に歌祭文や音頭にもうたわれ、紀海音は「笠屋三勝二十五年忌」を書いたし、延享四年(一七四六)には「女舞剣紅楓」が上演された。

つて下さるを、かけて聞いて、どの母でも嬉しがるまいようはない。これにお通という子まで儲けた三勝殿、まめな顔見て嬉しいと、余念なければ氣も落ち着き、三勝へ半七さんの母御さんとて、さつてもきつい御すいほう、そう御存知の上からは、何を隠さん様もなく、へ真実ほんの母さんに、逢うた心とうちとけて、底意渾の海人小舟、漕ぎ終せたる如くなり。母へいやはて、世の中に君傾城を歴々が、嫁にするもある習い、ああ互いに好いた同士、半七と夫婦にして、睦まじい顔見るならば、老い行く末の楽しみと、明け暮れ思っています」と、へ聞いて飛び立つ嬉しさに、手を合わすればその手をとり、ああ思うことまなならぬこそ浮世なれ。母へ私やこなさんに無心があつて来ました。と言葉のうちより、三勝へこれはいかな、頼むの無心とは他人向き、どのような仰せでも、そむかぬが嫁の役、という顔見るより涙ぐみ、母へ近頃無心な事ながら、半七と縁を切つて下され。三勝へエエ、とびつくり、へあの、半七さんとかえ。母へおおいにも。三勝へいえ、いえ、そりやならぬ、わしやいやじゃ。へ一夜流れの仇夢も、別れは惜しき人心、まして馴れそめも五年、子までなしたる半七さん、炎の中に暮そが、あなたをのいて片時も、浮世の日影が見らりようか、むごい、つれない、胴欲な、別れという字は聞いてさえ、胸にしみじみ悲しいと、恨み涙にくれいたる。

五、義太夫 壺坂観音霊験記 — 壺坂寺の段 —

福地桜痴(一説に伊東椿増)作の浄瑠璃に、二世豊沢団平の妻千賀が加筆した、明治新作浄瑠璃の代表作。団平が作曲し、明治十二年十月、大阪大江橋席で六世豊竹島太夫が最初に語り、その後、さらに曲を改めて明治二十年稻荷彦六座で三世

その「女舞剣紅楓」の第五段目を脚色したのがこの新内曲で、初代鶴賀若狭の直伝曲。しかし、その前に若狭の師である富士松薩摩掾にも同名の作品があるので、基本の形は早くにできていたものだろう。

新内ではその複雑な筋をとり払い、半七と三勝に関するところだけを抜きとって脚色してあり、人物も背景もわかりやすくなっている。三勝は半七との間に子までなした深い仲である。その三勝が娘お通の手をひいて美濃屋へ帰ってきたところ、四十あまりの女房が、用ありげに訪ねて来たところからこの場面がはじまる。よくきいてみると半七の母親で、嫁と姑の名乗りもそこそこに、半七と別れてくれという頼み。意地悪でなく、ほんとうは善人である母親の性格はまだ明らかでない。しかし三勝には別れる気持はさらさらない。せっかくの対面で、すぐに別れるという半七の母に向かつて、へ一夜流れの仇夢も……と、かきくどくところはけだし絶唱で、きかせどころ。そのあとどうなるのか、時間があればじっくりと続きをきかせてもらいたいところである。

へこの広い大阪に、住む所さえ長町と、言の葉草の露深き、裏の木枯吹きそらす、美濃屋と書きし目印の、のれんの文字は太けれど、細き煙のかせ世帯、浮名にふれし三勝が、娘お通が手を引いて、楽屋戻りのとりなりも、伏見常盤に異ならず。(中略)へ四十路あまりの女房が、用ありそうに表口の、のれんの家名に小うなずき、母へちと御免なされませ」と、へずつと入り、へこなさんが踊り子の三勝殿というのか、ついに逢うたことはなけれど、五年このかた聞き及んだ三勝殿、わしや大和の五条、茜屋の半七が母でござる。三勝へエエ、とびつくり、へあのそれは」といわんとせしが気味悪く、うろろろするを見てとつて、母へいやこれ三勝殿、もしやあなたを恨みに来たかと思わしやろが、さらさらそうした心はない。へ草で育った大和の女子も、梅の色よい浪花の女郎も、色に迷うは同じこと。わしやこなさんに礼いに来ました。あの見る影もない半七にほだされて、何ぼの出世も目につかず、可愛が

大隅太夫と上演、翌年には歌舞伎化もされ、以来人気曲になった。

「三つ違いの兄さんと……」のお里のクドキはとくに世に知られている。なお壺坂寺もこの浄瑠璃の評判のおかげで、辺鄙な場所にもかかわらず、参詣する人が多くなったという。座頭の沢市は、洗濯や針仕事で家計を助けるお里と、ここ壺坂寺のほとり土佐町に暮らしている。ところがそのお里は、この三年ほどは、毎夜七つ過ぎには家にいない。お里は実は沢市の目をなおしたい一念で、この壺坂の観音様に祈願をこめていたのだ。それを知った沢市は、自分も参籠しようと、夫婦は揃って寺に向かう。沢市は三日間断食するため、お里を帰すが、一人になると、なおる見込みもなし、お里にこれ以上の苦勞はかけまいと、谷底に身を投げてしまう。山へ戻ったお里は、沢市を探すうちに谷底に沢市の死骸を見つけ、死後も盲目の沢市の手引きをしてやらねばと思ひ、あとを追う。と、そこへ観音様があらわれ、お里の貞節と信心を愛でて、寿命を延ばしてやると告げ、さらに沢市の目も見えるようになるといふ。夫婦はご利益に感謝し、万歳を舞ってお礼参りする。今日はその後半を演奏する。

へたどり行く。へ伝えきく壺坂の観音は、人皇五十代恒武天皇奈良の都にまします時、御眼病はなはだしく、この壺坂の尊像へ、時の方丈道喜上人一百七日の御祈禱にて、たちまち平癒あらせられ、今にいたつて西国の、六番の札所とは、みな人々の知るところ、げにありがたき靈地なり。へ折しも坂の下よりも、詠歌を道のしおりにて、沢市夫婦ようようと、御寺間近く詣で来て、

「サアサア沢市様、ソレ観音様へ来たわいな」
「ハアモウここが観音様か、ヤレヤレありがたや、ありがたや、ハア、南無阿弥陀仏。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」
「コレコレこちらの人、今宵こそゆつくりと、御詠歌を夜もすがら、あげ

七、長唄綱つな

館やかた

明治二年、根岸の勘五郎といわれた十一代目杵屋六左衛門作曲。このもととなつたのは、寛保元年(一七四一)七月江戸中村座上演の「兵四阿屋造」で、これを復活したものが、歌詞はほとんどそのまま使っている。

この曲は、「戻橋」の後日物語で、戻橋で鬼女の腕を切り落して帰った渡辺綱は、このような悪鬼は七日以内にその腕を取り戻しに来るといわれ、阿倍晴明のいいつけ通り、門戸をとぎしてひきこもっている。そこへ綱の故郷から伯母が尋ねて来て、強引に家の中へ入りこんでしまふ。そしてせびともその腕を見せてくれといひ、見ているうちに鬼女の正体をあらわし、腕をとりもどして虚空に消え去るといふ筋。

曲全体が劇的要素を持ち、筋がわかり易くできているので、流行している。なお、新古演劇十種の「茨木」は同じ趣向の曲だが、これは明治十六年に三代目杵屋正治郎が作曲したもので、素ではあまり演奏されない。

へさるるほどに、渡辺の源次綱は、鬼神の腕を切り取りつつ、武勇を天下に輝やかせり。へさりながら、かかる悪鬼は七日のうちに、かならず仇をなすなりと、陰陽の博士、晴明が勘文にまかせつつ、へ綱は七日の物忌して、仁王経を誦誦なし、門戸を閉じてぞいたりける。へすでに東寺羅生門の、鬼神の腕を切り取りしこと、これひとえに、君の御威徳ならずや、然るに、晴明が勘文にしたがい、あら気づまりの物忌やな。

へかかるところへ、津の国の渡辺の里よりも、訪ねて伯母のきたしぐれ、へ紅葉の笠も名にめでて、錦をかざすふるさとの、孝の力や杖つき乃の字の姿をも、うしとはいわで牽かかれる、綱が館に着きにけり。へ門の外にたたずみて、いかに綱、津の国の伯母がはるばる参りたり。この門開き候え、疾く開けめされい。へ内には綱の声高く、はるばるとの御

第二部

富崎春昇作曲

一、箏曲昔むかし

漸おぼし

延享三年(一七四六)に初演された義太夫節の「楠昔漸」は、『太平記』巻六を題材にして、さらにそれを五節句にあてはめた作品。とくにその三段目は有名で、俗に「どんぶらこ」といふ。その名称の通り、お爺さんとお婆さんが、昔々の桃太郎の物語そのままに暮らしているという場面である。

昭和十二年五月、文楽でこれを上演したとき、綴太夫の相三味線の豊竹新左衛門に頼まれ、三の口の砧の段で、お婆さんが川で洗濯をするところで弾くメリヤスを作曲した。そのときはほんの二三分だったが、それを縁にこの歌詞をもらい、節付して地歌の曲としたもの。

箏と三絃の曲だが、箏の調子を高くし、手事では、洗濯の水を汲んだりかいだしたりする様を、技巧的な手法であらわしている。

へ昔々その昔、爺は山へ柴刈りに、婆は川へ洗濯にと、子供すかしを今ここに、思いあわせし河内の国に、松原村に年をへて、身の達者なが徳太夫、七十越えし老の坂、柴刈りに行く道すれと、婆は六十路の水は汲む、洗濯だらひ頂いて、鶴の比翼の共白髪、誘いあうたる人づれば、殊勝にもまたしおらし。婆は川辺にたらいをおろし、流れに下りて洗ひもの、もみ洗いより踏み洗いと、川辺の石を台にして、

〔手事〕

へかいげ柄杓のかけ水も、さつと打つてはとんとんとん、さあざとんとん、さあざとんとん、さあざとんとん、砧拍子や三つ拍子、水さわやかにかけ流す。水さわやかに、かけ流す。

出なれど、仔細あつて物忌なれば、門の内へはかなわす候。へなに、門の内へはかなわぬとな。へ是非に及ばず候。へあら曲もなき御事やな。和殿が幼なきその時は、みづから抱き育てつつ、九夏三伏の暑き日は、扇の風にて凌がせつ、玄冬素雪の寒き夜は、ふすまを重ねあためて、和殿を綱といわせしこと、ああ皆みづからが恩ならずや、恩を知らぬは人ならず。ええ汝は邪慳者かなと、声をあげてぞ泣き給う。へさしにも猛き渡辺も、あくまで伯母に口説かれて、是非なく門をおし開き、奥の一間に靖じける。

へ伯母を敬い頭を下げ、さても只今は不思議の失礼仕つて候、まず御酒一献きこし召し、その後御曲舞を所望申し候。へめでたき折なれば、舞おうずるにて候、へ御酒の機嫌をかりそめに、差す手引く手の末広や、へあら面白の山廻り、二上りへまず筑紫には彦の山、讃岐に松山降り積む雪の白峰、河内に葛城、名に大峰、丹波丹後の界なる、鬼住む山ときこえしは、名も恐ろしき雲の奥、舞の合方へなつかしや。

本調子へいやと綱、鬼神の腕を切りとられし武勇のほど、凡そ天下にかくれなし、してその腕はいづこに在りや。へすなわちこれにと唐櫃の蓋うち開けて、伯母の前にぞ直しける。へそのとき伯母はかの腕を、ためつすがめつしげしげと、眺めながめていたりしが、次第しだいに面色変り、かの腕を、取るよと見えしがたちまちに、鬼神となつて跳び上り、へ破風を蹴破り現われ出で、あたりを睨みし有様は、身の毛もよだつばかりなり。へいかに綱、我こそ茨木童子なり。わが腕を取り返えさんそのために、これまで来ると知らざるや。へ綱は怒りて早速を踏み、斬らんとすれども虚空にあり。へいかにかなして討ち取るべしと、思えど次第に黒雲おおい、鬼神の姿は消え失せければ、かの晴明が勘文に、背きしことの口惜しきよ。なお時を得て討ち取るべしと、勇みたつたる武勇のほど、へ感ぜぬ者こそなかりけれ。

二、宮 菌 鳥とり

辺へ 山やま

宮菌節は、もと上方に生れ、幕末ころから江戸に定着した浄瑠璃。江戸では、むしろ菌八節といういい方で知られており、独得な三味線の音色と、哀切な語り口は、永井荷風の小説「雨瀟々」にも描かれている。

京都市郊外、東山の中腹付近の鳥辺山または鳥辺野というあたりは、男女の心中道行にふさわしい場所として有名だった。

それでこの鳥辺山を舞台にした事件は、古くはおまん源五兵衛、お染半九郎などで知られていたが、明和四年(一七六七)ごろ、宮菌節に作曲され、集大成された。

この曲は、宮菌節の代表曲で、幽玄な中にも妖しいばかりのなまめかしさを漂わせている。

なお、お芝居でよく上演される「鳥辺山心中」は、大正四年に岡本綺堂がこれらの実説やいつたえをもとに創作したものである。

へ一人来て、二人連れ立つ極楽の、清水寺の鐘の声、はや初夜もすぎ、四つも告げ、九つ心も、恋路の闇にくれは鳥、あやなき空や、浮橋に、つながる縁や縫の助、つい仇惚れも誠となりて、ほんの女夫になりたいと思ふ思ひはままならぬ、今はこの身に愛想もこそも、

二上りへ尽きた浮世や、いざ鳥辺野の、女肌には白無垢や、上に紫藤の紋、中着緋紗綾に黒縷子の帯、年は十七初花の、雨にこがるる立ち姿、男も肌は白小袖にて、黒き輪子に色浅黄裏、二十一期の色盛りをば、恋という字に身を捨小舟、どこへ取りつく、鳥とても無し。

本調子へきく度々につらかりし、父母の事思ひ出し、あとの嘆きを思いやり、ここから去んで呉竹の伏し沈みたる袖の露、浮橋涙もろともに、父さんや母さんのあるはお前も同じ事、その親々に苦をかける。不孝者には誰がした、合惚れという仲人や、枕の咎じやないかないな、恋は心の

外とやら、夕べも内の花車さんが、わしに意見を真実の、色という字があればこそ、好かぬ勤めの辛抱も、好いた殿御へ心意氣、いとしく愛が定ならば、五度逢うものを三度逢い、二度を一度の逢瀬には、親おやかたの機嫌もよく、色で身をうつこともなく、世間に多い心中も、金と不幸で名を流す、色で死ぬるは無いぞとよ。恋は思いのはじめにて、盛りが憎い迎い駕籠、そのきぬぎぬや朝顔の、夕顔にまでわけへだて、辛気な苦界まならぬ、悲しいことや辛いこと、生きる死ぬるの手詰にも、必ずかならず若氣を出し、短気な心持ちやんなやと、重ね井筒の上越した、粹な意見も上の空、お前に迷う心から、面白い氣で聞いていた、親御様へも世の義理も、わしから起るこのしだら、堪忍してとばかりに、すがり付いて泣きいたる。

二上りへ思い切らしやれ、もう泣かしやんな、わしは泣かねどソレこなさんの、いいやそなたの、いやこなたのと、顔と顔を見合せて、一度にわつと嘆くにぞ、一足ずつに消えて行く、終にこの野の春降る雪や、折からにはや寺々の鐘も撞きやみ、夜はしらじらと、鳥辺山にぞ着きにける。

三、義太夫 増補 大江山―戻り橋の段―

大正十二年一月、大阪文楽座で、竹本綴太夫の若菜、竹本源太夫の綱で初演された。

もともと義太夫節には「大江山酒呑童子」という作品があり、姿らぬ人氣を得ていたが、明治二十三年、東京歌舞伎座で初演された常磐津の「戻り橋」（河竹黙阿弥作、五世岸沢式佐作曲）が知られてきたので、それを義太夫節に移したのも、都の警護にあたる源頼光の家臣渡辺綱は、ある夜主君の使いで一条の戻り橋にかかると、扇折の娘だという美女がたずんでいて、五条までの道連れを頼まれる。しかし月に照らされて水にうつる女の姿に不審の念を抱き、綱が問いつめると、女はたちまち愛宕山の鬼女の姿に姿する。綱は髭切丸の太刀

を抜き、鬼の腕を切り落とすという筋。

「春雨も、いつしか晴れて白々と、月照りわたる堀川の、早瀬の流れ落ち合せて、水音すき戻り橋。
へさても渡辺の源吾綱は、戻り橋へ来たたりしが、「四方はひっそと静まりて、怪しと思うものもなく、無駄足踏みし残念」と、一人つぶやき立ちいたる。

へ折ふしさと吹きおろす、風かあらぬか、岸の柳の騒がしく、心ならねば振り返り、

「ハテ心得ぬ、いま吹きおろす夜嵐の、身にしみじみと五体の熱氣、さては妖魔の仕業にて、われを威さん企みよな。いかなる妖魔の術あるとも、それを恐るる綱にあらず、イデ妖魔を退治して、君へ土産に参らせん、イザ来い、来たれ」と太刀引きそばめ、木の下蔭へと忍び入る。

へまたむら立ちし雨雲の、蔭洩る月をよすがにて、たどる大路に人影も、火影も見えずわが影を、もしや人かと驚きて、被衣に身をば忍ぶ摺り、けふの細布ならずして、女心に胸合わず、思い悩みて来りける。

「アア今宵の空の定めなく、降らぬうちと思えども、ここは一条戻り橋、見れば行き交う人もなし、アア頼りもなや」とたたずみて、しばし休らいたりける。綱は木蔭をたち出でて、

「アアイヤ、女性はいずれへ参られるぞ」
「オオこれは、お武家さま、妾は一条の大宮より、五条のわたりへ今宵のうち、ぜひ参らねばならぬ者が、女の身でただ一人、この物騒な夜の道、こわい／＼と歩むうち、今のあなたのお声にて、ほんにびつくりいたしました」

「ホホ、こわいと申すはもつともなり。五条のわたりへ参るとあらば、アア幸いのよき道連れ、五条のわたりへ用事もあらば、それがし送ってつかわそう」

「こはお情け深いその仰せ、お言葉に従いますれば、どうぞお連れなされて下さりませ」
「いざ参ろう」とうち連れ立つ。

へ折しも空の雲晴れて、月にありあり小川の流れ、水に映りし異形の姿、綱は目早く、

「いま水中に映りし影は」

わけて、姿優しき花菖蒲、引きつ引かれつ沢水に、袖も濡れにしことやらん

「こなたはなおも、うち解けて、それは御身の思い違い、かかる名もなき田舎武士、思いをかける者があろうか」

「イエ／＼、知っておりまする、立派なお名前」
「ムムなに、立派な名前とは」
「当時内裏を警衛の、都へ上りし源頼光朝臣の御内にて、渡辺の源吾綱殿ゆえ」

「ムムいかがいまして、わが名をば」
「サア、恋しと思う殿御ゆえ、とくと存じておりまする」
「恋しく思うというは偽り、御身がわが名を存せしは、妖魔の術であらうがや」

「オホ、／＼、またびつくりさそうと思つて、アノマア真顔で。コレ申し、御覧の通りは若菜」

「エへ、／＼、白々しくもぬかしたりな。汝は心付かざりしが、最前ここへ来る道筋、月の光にありありと、水に映りし異形の姿、なんとみめよき女に化けるとも、その本性は悪鬼ならん」

「ムム」
「サア、かく見抜きし上からは、その本性を現わすか」
「サア」

「君より賜わるこの御太刀、髭切丸の利剣の切れ味、すみやかに降伏さそうか」
「サア」

「サア／＼、源頼光が家臣、渡辺源吾綱が向かうたり、変化の正体現わせよ」と柄に手をかけ詰めたけたり。

「こなたの妖女はたちまちに、憤怒の相を現わして、次第次第に変ずる姿、眼怒らし大音声。
「われは愛宕の山奥に、幾年住みし悪鬼なり。かく見現わされし上からは、わが隠れ家へ連れて行きて、引き裂きくれん、いざ来い」と、

へいうより早く飛びかかって、綱が襟がみ、むんずと掴み、引き立てゆかんそのありさま

「ナニこしやくなり」とふり放すを、へまたも掴みし強魔の力、こなた

「エエ」

「アアイヤ、夜ふけぬうちに、はや疾く疾く」と、へ西へ廻りし月の輪に、遠くはなれて愛宕山、北野は近く清滝の、森はこなたと振り返り、見上げる顔にははらと、木々のしずくも雲運ぶ。またも雨かと立ち休らい、綱は女をいたわりて、

「歩み馴れぬ夜道にて、さぞくたびれしことならん」
「イエ／＼、妾よりはあなたこそ、足弱をお連れなされて、定めしおくだびれでござりましょう」

「ナニサ／＼、最前より見受けしところ、ハテあてやかなおことが姿、連れだつ道に馴れやすく、今は隔ても中空の、おほろも春の名残りとかや、都人とはいいなから、いとも優しき形風俗、異なことを尋ねれども、御身が父はなに人なるぞ」

「ハイ、お尋ねに預かり、お答え申すもおもはゆく、父は五条の扇折り、つねづね舞を好みしゆえ、妾も幼きころよりして、教えを受けしが身の徳にて、このほども、ある御所にお宮仕えをいたしました」

「ホホさもあらん、さもあらん、恥ずかしながらそれがしは、いまだ舞を見たることなし。ひとさし舞を見せられまいか」
「お送り下さるそのお礼に、ただいま御覧に入れましようが、なにを申すも途中のこと、拙き業とお叱りは、ただ幾重にも」と一礼し、女性は扇借り受けて、会釈をこぼし進み出る。

へ空も霞みて八重一重、桜狩りする諸人が、群れつつここへ清水や、初瀬の山に雪と見し、花の散りゆく嵐山、惜しむ別れの春過ぎて、夏のはじめにおくれにし、花も青葉に衣替え、木々の緑の美しや。

「テサテ面白きことなりしぞ、かかる技芸のある者を、妻に持ちなばよく楽しみ、春の夜道に結ぶ縁、解くか解かぬはおことが心ただひとつ、コレサ、どうか／＼と寄り添えば、女ははつと袖覆い、

「おたわむれとは知りながら、嘘にも嬉しいその仰せ、定めてあなたは奥様を、お持ちなされてござりましよう」

「ああイヤイヤ、まだ妻はめとらぬが、見らるる通りの武骨者、誰も妻にはなる人がない」

「なんのまあ、ないことがござりましよう、まぎまぎとしたそのお言葉、お情け深きお心に、今宵まみえし妾さえ、縁を結ぶ露もがな、思う恋路の初螢、いだしかねて胸焦がし、若葉の闇に迷うもの、都女郎はとり

へいも心に一思案、

「こりや、われも池田の稲川というては、国々へ名の通つた者、俺もまた大名のお抱え、ことに大阪は初めてなれば、この相撲、しくじるが最後、扶持ばなれじや、すりやこれ、二人ともに大事な相撲、九平太様の名代に恵海庵の仕返ししたれば、この算用はすんである。が、また錦木が身請けのことは俺次第、おこの鉄ヶ嶽が心のままじや。水心あれば魚心あり、頼むことも頼まるることも、まあ今日の相撲しもうてからのことにしようわい。われもずいぶん、神仏でもたたく廻しもうてから勝つようにせい。したが可愛いや、俺を取つたら骨身が砕けて、重ねて土俵を踏むことはならぬぞよ、どうぞ頭取衆を頼んで、振りかえてもろうてなりとして、取らぬ方が勝ちやろて。それともまた、取つてみようと思ふなら、なあ魚心あれば水心、稲川土俵で逢おう」

「強い言葉もどこやらに、味な鉄棒引きする雪駄、がらつかせてぞ出でて行く。へあとに稲川もろ手を組み、思案にくれていたりしが、(中略)へ始終立ちぎく女房が、涙かくして、

「おこちの人としたことが、さつきにから飯こしらえて待っているのに、ここで食べるか、奥へ据えよか」と、

「いやもう、飯なら食いとうない、ほんに場所から呼びにきた、どれ行て来う」と、へ立ちあがれば、

「そんならもう行かしゃんすか、これ稲川殿、それ髪が強うみだけてあるぞえ、人中へ見苦しい、結うて上ぎよう」と、

へ取り出す櫛箱、

「いや、結うていたら暇がある、つい撫でつけておいてたも」

へかたえに直れば女房も、押してはいわぬもつれ髪、びんのほつれを撫でつける、櫛のむねより妻の胸、写して見たき鏡立て、

「さよいか、見やしゃんせ」と、

へ向う鏡の蓋取つて、写せば写る顔と顔、

「もうし稲川殿、色も青ざめ、そして目の中もうるんで、どうやら気色の悪そうな顔付き、今日の相撲へはことわりいうて行かしゃんすなえ」

「何をあんだらつくぞえ、いつはともあれ、今日の相撲は鉄ヶ嶽にこの稲川、初日の出ぬ先から町中が待っている晴れの出逢い、何でも鉄ヶ嶽を土俵の砂へ埋まにゃおかぬ」

六、常磐津 戎詣恋釣針(釣女)

河竹黙阿弥作詞、六世岸沢古式部作曲。明治十六年十二月に発表されました。のち明治三十四年「戎詣恋釣針(えびすもうでこいのつりばり)」という題で舞踊劇として上演されたから、とくに知られ、流行するようになりました。

狂言の「釣針」の趣向をそのままかりたもので、おおかさと滑稽さの対比が見事にあらわされております。太郎冠者が醜女を釣り上げるところが、とくに面白くなっております。

へそもく、これは猿楽の、昔よりしてその技の、おかしといひし狂言師名に大蔵や鷲流の、姿をうつす釣女。大名へかように候者は、この所の大名にござる、ヤイヤイ太郎冠者あるか。太郎へハア、おん前に、大名へいたか。太郎へハア。大名へ汝も知る如く、この年まで定まる妻がない。うけたまわれれば、西の宮の恵比須三郎殿は、福者と申すこと、これへ参り、妻を申しうけよう存ずる。汝、供をせい。太郎へまことに仰せの如くでござる。西の宮の木びす三郎殿へ参るがようございませう。私も定まる妻がございませぬ。ついでながら申しうけませう。大名へさてさて、己れは卒爾な事をいうものじや。えびす三郎殿とこそうえ、きびす三郎と申す事があるものではない。太郎へハア、絵にかいた折はえびす三郎と申し、木で作った折は、木びす三郎と申します。大名へなかなか汝は物知りでおりやる。それがしは道不案内じやほどに名所旧跡を語りきかせよ。太郎へ畏まってござる。大名へして、向うに見える山は何山じや。太郎へハア、あれは山でござる。大名へこは夏山葉山じやが、何と申す。太郎へエエ何山は山でござる。オオそれへあん山からこん山へ、飛んで出たるは何者ぞ。頭にくつ、ふと二つ細うて、長うてりんとはなを、ちやと推した。謡へ死じや。大名へ何と申す。して西の宮はまだか。太郎へもはやこの森の中でござります。大名へさらば参詣をいたそうぞ。太郎へハア。大名へまづ鰐口にとりつこう。じやがん。いかに申し上げ候。われ今年まで

「いやいやそりや嘘じや、今日の相撲は鉄ヶ嶽に振つてやるお前の心」という口押さえて、「こりや声が高い、すりやさつきにからの様子、残らず」

「あ、一間できておりました。わずかな金に手詰まって、難儀さしやんすがわしや悲しい、いつそこのわけ、親仁様へ」

「たわけめ、それいっほどならこのように、人に叩かれ踏まれはせぬわやい。昔かたぎの親仁様、打ち明けて物いうとな、礼三様へ意見の何のとやかましい。若いお人の水の出端、もし命生害になったときは、こりや千日に菊つた茅じやわやい。ああ、急なことでさえなくば、工面のしようもあろうに、わずか二百両や三百両の金ゆえに、大事の相撲を振つてやらざるまいと、思えば不甲斐ないやら口惜しいやらで、俺やこの胸が裂けるようなわやい」

「お道理でござんす、道理じや道理じや」

へさりながら、それほどの大事のこと、連れ添う女房にかくさんす、お前の心がきこえぬぞや、へ相撲取りを夫に持てば、江戸長崎国々へ行かしゃんしたその後の、留守はなおさら女気の、ひとりくよくよ物案じ、惚れた女子はありやせぬか、短気な心は出やせぬかと、思い廻しの胸の内、推量して取りすがり、恨み涙に時移る。へはや追い追いの呼び使

「もうし閑取、土俵入りでござります、早うお出でなされませ、ちやつとちやつと」に稲川が、へしおしおとして立ちあがれば、

「そんならもう行かしゃんすか稲川殿」

「お鉄ヶ嶽を抱き込んで、工面の通り行きやかくべつ」

「もし行かねば」

「絶体絶命、これが暇乞いになろうもしれぬ、さらば」

へとはかり一声を、あとに残して出でて行く、へこれまあ待って稲川殿、たつた一言いいたいことと、へ見れどもあとは雲霞、

「こりやこりやいはいれぬところ、夫の命にかかわる勝負、わしもこれから相撲場へ」と、

へ帯引きしめて夫のあと、慕うてこそは、へ行く空に、響く櫓のとうからと、打ちしもうたる太鼓より、鳴り渡つたる稲川と、鉄ヶ嶽との相撲割、表にべつたり貼り紙も、張り裂く木戸口押し合ひへし合ひ、はや土俵入りの事終り、相撲の番数とりつくし、中入前を勇ましき。

無妻なり。大名へ三郎殿の利益にて、定まる妻を授け給え。へ授け給えと、一心こめて伏し拝む。大名へヤイヤイ太郎冠者、汝も拝め。太郎へ畏つてござる。じやがん。いかに木比須三郎殿へ申し候。へわれも定まる妻はなし。似合相応美しき、妻をお授けくと、三拜九拝したりける。大名へヤイヤイ太郎冠者、今宵は通夜をしよう。汝もまどろめ。太郎へ畏つてござる。大名へあら尊や。へ内陣の内ぞ床しきわが妻を、千代と契らん手枕の、袖をおおうてまどろみしが、程もあらせず夢さめて、大名へヤイヤイ、お告げがあつた。汝が妻になる者は、西の門の一の階にあらう程に、連れて帰れ、とお告げが。太郎へこれは如何な事、私のお告げもその通り。大名へ急いで参ろう参ろう。へ勇み悦ぶ足元に、落ちたる竿を取り上げて、大名へや、これは如何な事、妻ではのうて、竹の先に糸がついてある。これは何であらうぞ。太郎へ不思議なお告げでござります。大名へイヤイヤこれは悟つた。恵比須殿はふだん釣竿をはなさず、釣ばかりしてござるによつて、この針で妻を釣れということであらう。まず急いで釣りませう。エイ。へ釣ろよ。神の教えの釣針を、おろし、みめよき妻を釣ろうよ。合へ針をおろせば、へ不思議やな。気高き女を釣りあげて、大名へアラありがたや、さてもよい妻がかかつてござる。嬉しや。太郎へ何がさてお喜びでござる。大名へこれ。そなたは定まる妻じやによつて、目をかけてやる程に、夫を大事にしましませうぞ。や小野の小町か楊貴妃か、アラ美しい。太郎へイヤ申し。道々こつそり楽しもうと、背中へ入れてきたこの汲筒、お二人様の三三九度、これにてめでとう御祝言。大名へこれは一段の事じや。サアサア注げつげ。太郎へ心得てござる。大名へまず女子の方よりさしませい。女申しわが夫、必ず見捨てて下さるな。大名へなんの見すてよいものか。女へオオ嬉し。大名へ太郎冠者、祝して一つ謡うてくれ。太郎へ畏つて候。へ高砂や、この盆が、へ二世の縁、神の御前で祝言は、三郎様がお仲人、よしそれとても浮気心があるなら、ほんに罰が当るであるぞいな。必ず見捨てて下さるな。やいのやいのと寄り添えば、へかたえに聞きいる太郎冠者、気をもみあせり。太郎へヤ申し。その釣竿を私にお貸し下され、見事釣つて見せませう。大名へ早う釣れ。太郎へイヤ釣る段ではござらぬ。エイ。へ釣ろよ。釣るものは何々。鯛に鱈に恵方棚に撞き鐘、信田の森の狐にあらぬ釣針を、さげておろして三十二相、揃うた十七八を、釣ろう

よ、おかつさんを釣ろうよ。へ余念もなき鼻の下、オオ当るぞ当るぞ。どっこいしめたと引き上げれば、かつぎ目深にかつきし女。アラ尊や、かかったわ、サアサアこちへござれ、嬉しや。へサアサアこれからは三々九度の盃じや。これへござれ、何も恥かしい事はない。そなたと夫婦になるならば、春は花見、夏は涼み、秋は月見の酒盛に、冬は雪見のちんく鴨、天にあらば比翼の鳥、地にまたあらば連理の枝、必ずしもじは交るまいな。悪女へ何の変つてよいものかいな。太郎へま、ず何ともあれ御面相を。へかつぎをとればこはいかに、河豚に等しき醜女ゆえ。太郎へヤア、和御寮は鬼か、ばけものか。のう消えてなくなれ。悪女へのうわが夫、今おっしゃった楽しみは、嬉しゅうて嬉しゅうて、わたしは忘れはせぬわいなア。太郎へヤレ情ない、ゆるしてくれ。ゆるしてくれ。悪女へそりやつれないぞえ、太郎冠者どの。へコレこちを向かせ。エエ何じやいなア。へ思えば深い恋の淵、沈むわが身を釣糸に、へ結んだ縁の西の宮、ひる子儲けて二世三世、へ変らぬ色は榊竹の、末葉栄ゆる女夫仲、離れはせじと取りすがる。大名へめでたいな。太郎へおめでとうござります。へ笑い興せし能舞台、鏡の松の常磐津に、昔にかえる岸沢の、波の鼓のうちよりて、睡まじかりける次第なり。

七、長唄 京鹿子娘道成寺

この曲については、今さら書く必要もないほど、よく知られている。能の「道成寺」を基本にして、初演された宝暦三年（一七五三）までの「道成寺もの」の集大成曲である。作曲者として初世杵屋弥三郎の名をあげる人が多いが、むしろ編曲者といった方がいいかもしれない。とにかくすぐれた作品で、いつきいても楽しいし、何度きいてもあきない。近世三味線音楽の代表曲として、これほど広く知られた曲はない。長唄の代表曲であると同時に、広い意味での日本音楽の代表曲といつていいだろう。

誰ガカリへ花の外には松ばかり、花の外には松ばかり、暮れそめて鐘やひびくらん。

三下りへ鐘に恨みは数々ござる、初夜の鐘を撞く時は、諸行無常とひびくなり、後夜の鐘をつく時は、是生滅法とひびくなり、晨鐘のひびきは生滅々已、入相は寂滅為楽とひびくなり、きいておどろく人もなし、我も五障の雲晴れて、真如の月を眺めあかさん。

二上りへいわず語らぬわが心、乱れし髪を乱るも、つれないはただ移り気な、どうでも男は悪性者。へ桜さくらとうたわれて、いうて袂のわけ二つ、勤めさえただうかうかと、どうでも女子は悪性者、へ都育ちは蓮葉な者じやえ。

へ恋の分里、武士も道具を伏編笠で、張りとき意気地の吉原、花の都は歌でやわらぐ、敷島原に、勤めする身は誰と伏見の墨染、煩惱菩提の撞木町より、難波四筋に通い木辻に、禿だちから室の早咲、それがほんに色じや、ひいふう三三四、夜露雪の日、下の関路も、ともにこの身を馴染み重ねて、仲は丸山ただ丸かれと、思い染めたが縁じやえ。

三下りへ梅とさんさん桜は、いずれ兄やら弟やら、わきていわれぬ花の色え、へあやめ杜若は、いずれ姉やら妹やら、わきていわれぬ花の色え、へ西も東も、みんな見にきた花の顔、さよえ、見れば恋ぞ増すえ、さよえ、かわいらしさの花娘。

へ恋の手習いつい見習いて、誰に見しよとて紅鉄漿つきよぞ、みんな主への心中立て、おお嬉し、おお嬉し、末はこうじやにな、そうなるまでは、とんといわずにすまそぞえと、誓紙さえ偽りか、嘘か誠か、どうもならぬほど逢いに来た。へふつつり憎気せまいぞと、たしなんで見ても情なや、女子には何がなる、殿御殿御の気が知れぬ、気がしれぬ、悪性な悪性な気がしれぬ、恨みうらみてかこち泣き、露を含みし桜花、さわらば落ちん風情なり。

へさる程にさる程に、寺々の鐘、月落ち鳥啼いて霜雪天に、満潮ほどなくこの山寺の、江村の漁火、愁いに対して人々眠れば、よきひまぞと、立ち舞うようにねらい寄って、撞かんとせしが、思えばこの鐘恨めしやとて、竜頭に手をかけ飛ぶよと見えしが、引きかずいてぞ失せにける。

御 礼 邦 楽 連 合 会

本日はようこそお出かけ下さいまして、ありがとうございます。何かと不行届の点もありますが、お許しを願ひまして、どうぞごゆっくりとお楽しみ下さいますよう、お願い申し上げます。

今までには、このようにしてまとまって鑑賞していただく機会は、少なかったように思います。その少ない機会を大切にしようとして、出演者も一生懸命でござります。これからもうぞ続けて邦楽に変らぬ御支援をいただけますようお願い申し上げます。

来年も三月五日（日）に、このホールでの演奏会を予定しております。番組がままりましたら御案内をお送りいたしますので、はさみ込みのアンケート用紙に、おどころ、お名前をお書き込みの上、受付にお渡し下さいますよう、お願い申し上げます。また、今日おきき下さいました御感想や御意見などもお寄せ下さいまして、よりよい邦楽のために御指導を賜りますよう、合わせてお願いを申し上げます。

ありがとうございます。